

■**稲尾和久** プロ野球投手。西鉄奇跡の逆転日本一に「神様、仏様、稲尾様」、連投・多投も厭わず抜群の成績で“鉄腕”の異名。

いなおかずひさ

田中戦争始・1937＝ 大分県別府市北浜で、一本釣り漁師稲尾久作とその魚を行商して家計を支えるカメノの末子に生まれる。兄4人、姉2人。酒豪で、宇佐相撲でも怪童（後年の双葉山）に敗れるまで横綱を張り続けた強い父のもと、

日米開戦・・1941＝ 4歳： 敗戦・・・1945＝ 8歳： この年から、父の助手として伝馬船の櫓をこいで、度胸と強靱さ、バランス感覚を身につける。

新憲法公布・1946＝ 9歳： 三大事件・・1949＝12歳： 別府市に本拠地を置く実業団チーム星野組が第20回都市対抗野球大会で全国制覇し、オープンカーで市内をパレード、星野組のエース荒巻淳に憧れて野球選手を目指し、以後8年、毎日中指を引っ張り続ける。 朝鮮戦争始・1950＝13歳： 中部中学に入学。ポジションは捕手で、同校の生徒会長を務めるほど、成績も優秀、 独立回復・・1951＝14歳： 中日の東部中学の投手で、のち小倉高校に進んで甲子園準優勝する畑隆幸の妻さにライバル心、 中卒後はすぐに漁師になれという父を、担任教師や野球部監督、兄たちが説得してくれて、 TV放送始・・1953＝16歳： 大分県立別府緑丘高等学校商業科に入学すると、投手に転向、貧しさ故の破れスパイクで有名に、 自衛隊発足・1954＝17歳： 育英会からも奨学金。エースで四番となると、その地肩の良さに注目した南海ホークスがスカウトに訪れ、鶴岡一人監督が両親を料亭に招いてくれるほどであったが、父はプロ野球入りを認めず、そこに、西鉄ライオンズのスカウトも接触してきて、噂が広がり、窮地に立たされる。

55年体制始・1955＝18歳： 夏の甲子園県予選でも準決勝に進むも、サヨナラ負けするが、プロを目指して鍛錬を怠らず。南海とは契約寸前まで話が進んでいたが、福岡なら近くて良いという父の一言で、西鉄と契約、同期入団の畑隆幸の10分の1の契約金ながら、現金を目にした母は卒倒したという。

国連加盟・・1956＝19歳： *西鉄に入団。すでに強打者になっていた選手寮の寮長豊田泰光は、あまりの田舎者ぶりに嘔然とするが、起居をともにするうち、生活態度のまじめなこと、他人の罪をも背負おうとする心配りに感嘆し、一気に味方になる。当初は、主力打者相手の打撃投手であったが、制球力を磨き、豊田と中西太が三原監督に連言してくれて、オープン戦に起用されて活躍、高校の先輩河村が先発した開幕戦で、大差がついたことから、彼が三原に起用を連言、いきなりリリーフデビュー、先発に起用されても好成績で、しり上がりに登板機会も増えて、21勝6敗、西鉄を逆転のリーグ制覇に導く。パ・リーグ記録1.06の最優秀防御率と新人王のタイトルを獲得。日本シリーズでは、高卒新人投手として先登板するに至る（バでは50年後まで破られず）。 なべ底不況・1957＝20歳： 天狗にならず、2年目のジグスにも無縁で、当時のプロ野球記録のシーズン20連勝など35勝を挙げ、投手部門のタイトル全てを独占、最年少でリーグMVP。日本シリーズでは、西鉄が巨人に圧勝。出る杭は打たれるという様々な嫌がらせに、いやな顔せず、全てに応える我慢強さで凌ぎ、

インスタンダード・1958＝21歳： 33勝で史上初の2年連続MVPを獲得。リーグで独走していた南海を奇跡の逆転優勝すると、読売ジャイアンツと対戦した日本シリーズでは、稲尾は7試合中6試合に登板し、3連敗後、三度目の先発投手でシリーズ初勝利。第5戦でリリーフ登板すると、シリーズ史上初となるサヨナラ本塁打を自らのバットで放ち勝利投手となった。第6・7戦では2日連続での完投勝利で、西鉄が逆転日本一を成し遂げ、地元新聞に「神様、仏様、稲尾様」の見出しが踊った。チームも、3年連続日本一で、西鉄黄金時代の中心選手の一人になった。故郷の別府に凱旋、大歓迎を受けるなか、母から父が末期癌と知らされ、最後の望みという海辺の陽当りの良い家を、球団からの借金で実現、直後に父は死去。この年、大宇野球からプロに入った長嶋と、以後、日本シリーズで名勝負、杉浦は良きライバルになる。

美智子妃・・1959＝22歳： 本多猪四郎監督映画「鉄腕投手 稲尾物語」で本人役出演。30勝を挙げ、史上唯一の3年連続30勝を記録するが、勝率、防御率はデビュー以来ワーストで、チームも4位に終わり、三原監督も退団、ショックとなる。

安保闘争・・1960＝23歳： 尺八の名取の娘荒木律子と結婚。新たな川崎徳治監督のもと、20勝にとどまって挫折を感じるとともに、中西と豊田の確執にも苦勞するなか、父の格言を思い出し、驕りの虫を退治して心機一転、

タイタイ病始・1961＝24歳： 78試合に登板（パ・リーグ記録）、当時は新記録とされたが、のちに、勝利数が修正されたヴィクトル・スタルヒンに並ぶ史上最多タイのシーズン42勝を記録。目の前に升目のようなものが見え、目標物のような感覚の、そこで離せば狙い通りにいったという域に達するが、シーズン20与敬達（故意の四球）というNPB記録もつくったように、監督のいうとおりの素直な性格で、出場し続けたため、肩に違和感を感じ始め、

全国総合計画1962＝25歳： 怖くもあり人間味もあった豊田が会社と館館をさたして退団。史上最速で、通算200勝を達成、 TV宇宙中継始1963＝26歳： 28勝を挙げて、西鉄優勝に貢献。この年まで、プロ入りから8年連続で20勝以上を挙げ、日本シリーズには通算4回出場し、最多タイの通算11勝を挙げる「鉄腕」ぶりを示すも、ダマシダマシの投球であった。この時、初めて対戦した巨人の王貞治は稲尾を投手の鑑と思い、航空会社の招待で、長嶋、野村という球界の四大スターで欧州旅行、酒豪の稲尾と意気投合して生涯の友になった。ついに肩を故障し、

東京リビッツ 1964＝27歳： *初めて1勝も挙げられないシーズンとなった。以降、肩に負担をかける鉄球練習を続け、 大学紛争始・1965＝28歳： 突然痛みが消えるも、投球は凡庸で、先発としては、約2年ぶりの白星を手にするのがやっとであった。 いざなぎ景気1966＝29歳： リリーフに転向すると、最優秀防御率のタイトルを獲得するなど、技巧派ぶりを発揮、先発した対東京オリオンズ戦では75球で完投し、オリオンズの小山正明投手も87球で完投したため、合計162球の最少投球数試合の記録も作っている。投手コーチを兼任するようになると、若手投手の指導が楽しみになり、前年に入団し、バッテリーに転向していた尾崎将司に将来性を感じて、特訓するうち、自分のゴルフ場通いにも連れ出したところ、一瞬でのめり込み、

美濃部都知事1967＝30歳： 2年連続でチームの2桁勝利投手を4人同時に輩出。退団し、のちプロゴルファーになって大活躍する。 全共闘リーク・1969＝32歳： *門眼破りの飲酒で帰る際、高い壁から落ちて、腰を痛めて再起不能になったところに、“黒い霧事件”が発覚して、中西監督との交替を要請され、現役を引退。24番を永久欠番とする話を断り、有望な選手のための保留欠番として、西武時代にも多くの選手が使うが、2012年の生誕75周年に、功績をたたえて永久欠番になった。母カメノが、息子を励まそうと福岡に向かう途中、バイクにはねられるも一命をとりとめ、医者が、その強靱な身体と我慢強さに敬服したという。

大阪万博・・1970＝33歳： 専任監督として最年少で、ライオンズの監督に就任するが、“黒い霧事件”で次々と主力を失い、 石油ショック1973＝36歳： 球団も売却される中で指揮をとり、3年連続最下位と低迷。会社の方針とも相いれなくなり、 角栄金脈辞任1974＝37歳： 解任された。 クラブール事件1975＝38歳： RKB毎日放送の野球解説者となり、 成田衝突・・1978＝41歳： 中利夫監督の下で中日ドラゴンズ一軍投手コーチになって、星野仙一と出会い、 革新大敗北・1979＝42歳： 藤沢公也を新人王、小松辰雄を抑えの切り札としてデビューさせる。知人の日本航空パイロットからの誘いで（日本航空棒球隊）総監督になり、以後、度々中国に赴き中国チームとの親善試合、技術指導。

・・・・・1981＝44歳： 中日コーチを辞任して、RKB・TBSに復帰。 中曽根内閣・1982＝45歳： 大阪に移り、朝日放送で野球解説者を務めるが、 デイズ・ニークト・1983＝46歳： 辞めて、 ・・・・・1984＝47歳： 数年以内に福岡に移転させる条件で、ロッテオリオンズ監督に就任。熱烈な崇拜者落合博満に出会い、肘の手術明けだったエース村田兆治を毎週日曜日に中6日で登板させる起用法をとった。それに応じて開幕から11連勝した村田は以降“サンデー兆治”と呼ばれるようになったりするが、球団は移転先へ、

バブル始・・1986＝49歳： 解任、ユニフォームから完全撤退。その後は、日刊スポーツ野球評論家、朝日放送の野球解説者を務め、 ソ連崩壊・・1991＝54歳： 野球殿堂入り。 55年体制終・1993＝56歳： 再びRKB毎日放送の野球解説者になり、テレビのワイド番組『今日感テレビ』のコメンテーターにもなる。 ・・・・・2000＝63歳： プロ野球マスターズリーグが発足すると福岡ドンタックスの監督になり、“黒い霧事件”で永久追放になっていた後輩で愛弟子の池永正明を表舞台に久々に登場させ、彼の復権に大きな力を発揮した。 小泉9.11テロ2001＝64歳： 晩年は体調面の問題もあるなか、長らく沢村賞選考委員を務めていたが、

・・・・・2007＝70歳： 故郷に、別府市民球場が完成するのにあわせた『稲尾記念館』の開館に奔走し、『今日感テレビ』には出演を続けていたが、クライマックスシリーズで解説したのを最後に、同年の沢村賞の選考会議には欠席。手足の痺れを訴えて入院。悪性腫瘍のため、没した。当日は稲尾が委員を務めていた正力松太郎賞選考委員会が開かれ、愛弟子の落合博満が選出された日で、葬儀で弔辞を読んだのは、西鉄には関係なく、生涯の親友ソフトバンク監督の王貞治であった。そして、投球術のエッセンス「鉄腕二十四ヶ条」が書き残されていた。